

「公害問題」から「環境問題」へ

水俣地域における「不知火海総合学術調査団」の活動を手掛かりに

小松原織香*

はじめに

「公害問題」は、加害企業の環境汚染・環境破壊によって起きた「被害-加害」関係を中心とする社会問題である。公害問題では、経営者、労働者、地域住民、行政職員など、多くの人々の「人と人との関係」で紛争が起き、解決に向けて法廷闘争や政治活動が行われる。それに対して「環境問題」はより広い問題群を捉える概念である。公害問題を含むのはもちろんのこと、地球温暖化や特定の動植物の種の保護、地域の環境保全まで幅広い問題を包括する。これらの問題では、「人と人との関係」だけではなく「人と自然との関係」も重視される。

本稿では水俣地域での「不知火海総合学術調査団」の活動を取り上げ、「人と人との関係」を中心にして考えられていた「公害問題」が、議論や研究が進むうちに、「人と自然との関係」を含む「環境問題」へと移行していったプロセスを明らかにしたい。「不知火海総合学術調査団(以下、調査団と略す)」は、1976年から1983年まで、水俣地域で研究活動を行なった。調査団は、社会学、歴史学、政治学、医学など多様な専門分野を持つ研究者で構成された¹。その研究成果は『水俣の啓示: 不知火海総合調査報告²(以下、『水俣の啓示』と略す)』として出版された。

調査団についての先行研究は、『水俣の啓示』における「市井-最首論争」に議論が集中している。この論争は、哲学者の市井三郎が水俣地域の問題を人類史の観点から論じ、水俣病患者は「淘汰」されていると表現した³ことに端を発する。それに対して、生物学者の最首悟が、苦しみの中で生きる患者のことを「淘汰」されているという言葉で表現すること自体が差別的であるとして、猛然と反論した⁴。この調査団内部で起きた論争については、鬼頭秀一⁵、川本隆史⁶、森本直紀⁷らが総括し、市井を批判的に論じている。この論争は、哲学・思想

*龍谷大学矯正保護総合センター嘱託研究員、同志社大学嘱託講師。

電子メール：<http://orika.nobody.jp> の送信フォームより。

¹ 調査団の結成の経緯や活動については森下 [2014] が詳しい。

² 色川編 [1983]。

³ 色川編 [1983]、pp.389-412。

⁴ 色川編 [1983]、pp.413-426。

⁵ 鬼頭 [2007]。

⁶ 川本 [2008]。

分野の研究者が水俣病研究を進める上で、研究倫理の観点から繰り返し議論されるべきだろう⁸。

他方、先行研究は調査団内部の論争に焦点を当てており、実際に調査団が現地で行なった活動や研究成果にはほとんど言及していない⁹。『水俣の啓示』には、宗像巖や鶴見和子が執筆した論文が掲載され、画期的な思想研究が展開されている。また、『水俣の啓示』に収録された羽賀しげ子の「調査団日誌」は団員と水俣地域の人々との関係を豊かに描き出している。さらに、現存する調査団のレター（内部通信）や関係者の手紙、講演録などからは、調査団の活動のより詳細な様子や、『水俣の啓示』以降の活動を垣間見ることができる。そこで私は、調査団の活動について、『水俣の啓示』に限らず、より網羅的な資料収集を行い、再検討を行った。そこから浮かび上がるのは、水俣地域の人々の「人と自然との関係」を中心においた環境思想である。

調査団は発足当初は「公害問題」による共同体の変容を中心に研究を進める予定であった。その時点では、調査団の研究は「人と人との関係」に焦点が当てられていたのである。ところが、団員が現地でフィールドワークを行い、水俣地域の人々と深く関わる中で、「人と自然との関係」を中心においた思想研究が、宗像や鶴見によって展開されることになった。それと同時に、水俣地域の人々は、調査団の思想研究によって可視化された自らの「人と自然との関係」を、再認識することになる。それを受けて、水俣地域の人々は、自主研究グループ「不知火海百年の会」を立ち上げる。この「不知火海百年の会」は当事者が主体となり独自の方法で自らの環境思想を掘り下げ、表現活動を展開した。以上のように調査団の活動とその影響を明らかにすることで、「公害問題」として提起された課題が「環境問題」へ移行していくプロセスを明示することができる。

第1章では調査団の活動を概観し、調査団が水俣地域の人々との深い関係を築く中で、団員が「人と自然との関係」に気づいていったプロセスを明らかにする。第2章では鶴見と宗像の論文を取り上げ、「人と自然との関係」を中心とした思想研究の内容を明らかにする。第3章では、「自然」を対象にした科学調

⁷ 森下 [2014]。

⁸ 市井論文については、色川の判断で最首論文と両論併記で掲載された。しかしながら、掲載に至る前に、内部の研究会では2時間半にわたって厳しい議論が展開されている。最首をはじめとして、鶴見、石田、色川、土本が、市井の論文を痛烈に批判している。色川はこの時点では、市井に対して「政策レベルとそれに対応する人間の原理的レベル両方やるのはまずい。市井さんには水俣病の哲学みたいなものを書いてほしい。具体的なものから普遍へと追いつめる。それがあなたの哲学ではないか」と迫っている（「調査団ニュース」、No.42、1980年10月17日）。この指摘については、約30年後に鬼頭 [2007] が掘り下げて論じている。これらの研究倫理の問題は、現代に至るまで変わらず残っている。

⁹ この点については報告集『水俣の啓示』の下巻に収録された「座談会」で鶴見和子が言及している。鶴見は、市井を批判する最首の論文だけが、『水俣の啓示』の上巻を読む際に重視されていることを指摘し「非常に不幸だと思える読み方」と指摘している（色川編 [1983]、p.499）。

査を行う第二次調査団の活動を取り上げ、「活動の理念」と「突き当たった困難」を明らかにする。第4章では、調査団の影響を受けた活動を開始した「不知火海百年の会」を取り上げる。この会についての残存する資料を元に、水俣地域の人々が自主研究と表現活動を展開していたことを明らかにしたい。

第1章 不知火海総合学術調査団の活動

1976年に発足した調査団は、当時ではまだ珍しい学際的な共同研究チームであった¹⁰。ただし、自然科学を含めた学際研究というものの、中心となったのは社会科学班の面々である¹¹。社会科学班は事務局を設置しており、事務仕事を担った羽賀しげ子は、調査団の結成から解散まで、45号にわたる手書きのレター（内部通信）「調査団ニュース」を発行している¹²。調査団の報告書である『水俣の啓示』には、羽賀の「調査団ニュース」を元にした「調査団日誌」が収録され、水俣地域での団員の活動が生々しく描き出されている。ここでは、資料を基にして調査団の活動を概観し、団員が「人と人との関係」に焦点を当てた研究を目指してフィールドワークを開始し、現地で困難に突き当たり、その困難を乗り越えて調査をする中で、「人と自然との関係」を発見していったというプロセスを明らかにしたい。

（1）調査団の研究目的

調査団長の色川大吉は、1976年の調査団の出発直前の新聞記事のインタビューで、研究目的として近代化による「共同体の崩壊」の解明を挙げている。色川は民衆史の専門家であり、それ以前の研究でも、現地フィールドワークを通して、明治以降の社会構造と民衆の社会運動を研究してきた。その色川の視点から、調査団の活動も新日本窒素株式会社（現在のチッソ）が水俣地域で工場

¹⁰ 団員は宗像巖、石田雄、内山秀夫、宇野重昭、小島麗逸、菊地昌典、水野公寿、色川大吉、綿貫礼子、桜井徳太郎、最首悟、市井三郎、日高六郎、石牟礼道子、角田豊子、原田正純、羽賀しげ子である。中途での参加や離脱もあり、報告書の原稿を執筆したのは宗像、石田、宇野、小島、菊地、色川、最首、市井、石牟礼、角田、原田、羽賀である。

¹¹ 医学班は原田正純が組織し、熊本を中心に活動を行なったが、社会科学班との交流は少なかった。また、生物学者の最首悟は「環境調査班」の組織を依頼されたが、聞き書きを中心とした研究活動に取り組み、実質的には社会科学班に加わっていた。「環境調査班」が本格的に活動するのは第二次調査団である。

¹² レターはNo1~No.45（1976年4月24日~1981年4月9日）まで全て入手できた。「調査団ニュース」では、研究会や調査合宿の日程や、研究会での議論内容、執筆者が水俣で経験したことなどが丁寧に綴られており、羽賀が団員間の情報共有に努めていたことが窺える。「調査団ニュース」は、号によって「調査団だより」というタイトルになっていることもあるが、ここでは「調査団ニュース」に統一した。

を運営していく中で、「生産拡大に伴う環境の変化と社会階層の再編成¹³」を明らかにすることを研究の中心に据えた。また、この時点では色川は患者の所属するコミュニティの比較分析や、患者の一世、二世の意識構造の違い、高校生の意識調査などを研究計画に挙げている¹⁴。1976年の時点で、水俣病公式確認から21年が経過しており、第一次訴訟の判決もすでに出ていた。そのため、ある程度の運動史が積み重ねられた上で、水俣病地域の再生の可能性を模索するために共同体の研究を行うことが、調査団の目的に掲げられたのである。以上のように、活動初期は、地域コミュニティの分析を中心に研究計画が立てられており、「人と人との関係」を中心にした研究が進められていた。

(2) 調査団と水俣地域の人々の断絶

調査団は1976年から現地フィールドワークを開始する。ところが、調査団の初期の活動では、団員と水俣地域の人々との間に大きな断絶があった。そのことを3点に絞ってまとめておきたい。

①「使者」としての調査団

調査団発足の背景には、文学者・石牟礼道子による誘致活動がある。石牟礼は、1975年8月に起きた「ニセ患者事件¹⁵」以降、水俣病の運動が急速に冷え込んでいることに危機感を抱いていた。そのため、再び水俣地域を活性化させるために、色川に調査団の結成を懇願した。この時に石牟礼は、神社で調査団の成功を命がけで祈祷している¹⁶。また石牟礼は、調査団が水俣地域に来るたびに、「魂入れの儀」として手料理を振る舞った¹⁷。石牟礼にとって調査団は、神様が水俣に送ってくれた「使者」のような存在だったのである。

他方、石牟礼の要請に早急に応えるために急遽、結成された調査団は、資金面でも研究面でも準備が不十分であった。色川は理論研究の議論を行う場であ

¹³ 新聞記事、色川インタビュー、[1976]。

¹⁴ 新聞記事、色川インタビュー、[1976]。

¹⁵ 熊本県議会の公害問題特別委員会の委員長が、東京の環境庁で陳情を行った際に、症状がないのに水俣病患者を偽称する「ニセ患者」がいると発言した事件である。「ニセ患者発言」は大きな問題となり、水俣病患者や支援者は9月25日に抗議のための陳情活動を熊本県議会行った。その中で、二人の患者と二人の支援者が暴力をふるったとして、10月7日に逮捕され、訴えられることになった。この事件は後に謀圧裁判と呼ばれるようになり、色川は弁護側の証人として調査団の研究成果をもとに、この事件は被害者の運動に対する抑圧であると証言した。このとき色川は「支配とは何か。それは社会的差別を制度化することである(水俣病を告発する会[1986]、pp.378-379)」と述べ、水俣病問題は歴史的に固定化された差別構造の中で起きており、運動に対する抑圧もその連綿たる流れの中に位置付けられると主張した。裁判は1989年3月10日に最高裁で上告が棄却され、有罪が確定した。

¹⁶ 色川編 [1983]、上巻、p.9。

¹⁷ 色川編 [1983]、下巻、p.435。

った「近代化論再検討研究会」のメンバーに呼びかけ、理論を実地で検証することを提案し、団員を募って集めた¹⁸。研究資金については研究会費を集めたり¹⁹、熊本県で講演会を開いて講師料を集めたりして²⁰、まかなっている。その後、調査団はトヨタ財団から1977年から1979年の3年間で1007万円の研究助成を受けることになるが、それまでは自費での研究活動が続けられた。また、団員の中には水俣研究の専門家がおらず、研究の見通しも不明確であった。調査団は準備が不十分なまま、急ごしらえで見切り発車したのである。そのため、石牟礼が構想した「使者」としての調査団とは、実情があまりにもかけ離れており、特に活動初期には水俣地域の人々の思いを汲み取るようなキャパシティは備えていなかった。

②慣れないフィールドワーク

1976年に始まったフィールドワークで、団員は水俣地域の人々の置かれた状況の悲惨さに衝撃を受け、取り乱した。たとえば、菊地昌典は新聞記事のインタビューで以下のように述べている。

水俣を訪れてみての感慨は、到底、一口では言えない。言葉で表現できない重さが水俣にはあった。この衝撃は、学問とは何か、を根底から問いかけてきた。「進歩」とは何か、という莫たる、しかも分厚い壁をたちまち貫通して、専門の穴に閉じこもろうとする私を追い詰め、研究者の姿勢を問い詰めてきた²¹。

以上のように、菊地は正直に心情を吐露している²²。ほかにも、宇野重昭は、

¹⁸ 色川は第1期水俣展セミナーでこのことについて述べている。第1期水俣展セミナーは、1994年8月11日から1995年4月21日まで9回にわたって行われた。主催は水俣・東京展実行委員会（後の水俣フォーラム）である。色川は1994年11月29日に第4回を担当し、「不知火海総合学術調査団の成果と課題」と題して講演を行った。講演は書き起こしが残されており、その資料（色川 [1994]）を参照した。

¹⁹ 「調査団ニュース」No.5、1976年9月30日。

²⁰ 色川 [1994]。

²¹ 新聞記事、菊地 [1977]。

²² 付記しておくが菊地は一貫して自らの学問に疑問を持ちながら水俣の研究を行っていたことが報告書にも記録されている。菊地は学生の支援者の態度に厳しい言葉を吐き（色川編 [1983]、下巻、p.448）、水俣地域で「客観的立場を堅持したい（色川編 [1983]、下巻、p.441）」という立場をとり、水俣地域の人々との距離が遠かった団員である。最後の調査において、菊地は深夜三時まで続いた議論の後、正座で石牟礼に「私はこれが最後で、もう水俣に来ることもないと思います。大変お世話になりました。ありがとうございました。」と挨拶した（色川編 [1983]、下巻、pp.467-468）。菊池は、水俣は「学問の対象ではない。自分の学問にとっては不要であ（色川編 [1983]、上巻、p.31）」り、水俣では「理論化などより聞き書きシリーズのようなものこそ重要である（色川編 [1983]、上巻、p.31）」と結論づけた。この点について、羽賀が菊地に

「ここにはどうにも展望がなくやりきれない²³」として自らの研究が水俣では役に立たないのではないかと疑問を呈した。それに対して色川や鶴見は「展望がなければやらないの？²⁴」と反論している。さらに鶴見によれば、フィールドワークの後に学問的な議論が起きただけではなく、男性研究者の間で感情的なケンカが起きていた。それについて鶴見は、男性研究者が厳しい水俣地域の現状を目にして絶望したのだと指摘し、「男の人って、だいたい絶望するとお酒飲むでしょ、お酒飲めばケンカするんですから²⁵」と回想している。以上のように、団員は初期の活動では、水俣地域の人々との関わりの中で取り乱し、安定的な関係を作ることができなかつたのである。

③水俣地域の人々の拒絶

水俣地域では、調査団が訪問する前に、多くの報道関係者や芸術家、活動家、研究者などが現地で活動を行っていた。その中では、倫理的配慮に欠けた振る舞いをするものも少なくなかった。そのため、活動初期は調査団に不信感を持つ人々もいた。そのことが露呈するのが相思社の蘭康則²⁶の発言である。1976年4月1日に、団員は水俣地域の患者や支援者と懇親会を行っていた。その中で、蘭は次のように発言した。

自分は現実の運動の方が大事で、ものになるかならないかわからない調査に時間をとられるのはいやだ、運動は闘いの中からは生まれまいだろうし、知識人というのは信用してません。ま、何か成果でも出てくれば信用してもよい²⁷。

以上の蘭の言葉は、水俣地域の人々の調査団への不信を象徴している。調査団は石傘礼らの尽力もあり、表向きには手厚く歓迎されていたが、中には不信を持つものもいたのである。団員に対して、この蘭の言葉は深く刺さることとなった²⁸。他方、団員はこの後に開かれた水俣地域の人々との宴会に参加せず、

「聞き書きは大切です」と言われ、水俣地域の人々の語りの記録をするように背中を押されたことを述べている（[羽賀（1985）、p.iii]）。これは現地で当事者と向き合った理論研究者が出した、「研究者は何をするべきか」という問いの答えのうちの一つである。

²³ 色川編 [1983]、下巻、p.442。

²⁴ 色川編 [1983]、下巻、p.443。

²⁵ 鶴見は第2期水俣・東京展セミナーで講師を務めている。講演の書き起こしは、鶴見 [1998] に収録されている。引用箇所は p.31。

²⁶ 水俣病患者の支援者の一人。患者の自主交渉を求めるチッソ本社前の座り込みに参加している中で、チッソ社員に暴力を振るったとして逮捕され、1972年9月8日に起訴された。蘭は3年にわたって裁判を闘い、一部の主張は認められたが1975年7月7日に罰金刑が確定した。

²⁷ 色川編 [1983]、下巻、p.447。

²⁸ 色川編 [1983]、下巻、p.448。

歩み寄りを見せなかった。そのことについて石牟礼は団員に失望している²⁹。

これらの三点に代表されるように、調査団と水俣地域の人々との関係は、断絶を孕むものであった。一方では調査団は外部からの「使者」として水俣に变革をもたらすことを期待されていた。他方では調査団は外部からの「侵入者」として警戒され、信頼されていなかった。このアンビバレントな水俣地域の人々の「期待」と「不信」に対して、初期の調査団の団員は困惑を示している。

(3) フィールドワークの進展

(2) で述べたように、調査団の初期のフィールドワークでは混乱があったものの、三年から四年が経過すると、より安定的に水俣地域の人々との交流が行われている。たとえば、1979年の羽賀の調査日誌には、「個人差はあるものの、現地の人たちと先生たちの間に、ゆるやかな形で交流が生まれていた³⁰」と記録されている。団員は、水俣地域の人々にマムシ酒の作り方を教えたり、よもぎ餅をご馳走になったり、健康法の知識を交換したりしている。また、調査対象の漁業者の自宅に泊めてもらうものもある³¹。こうした密な人間関係が生まれた要因としては、継続して調査団が春季と夏季に水俣を訪問し、合宿を行って調査を継続したという、時間の積み重ねが大きいだろう。それに加えて、団員の調査方法の変更も行われている。

たとえば色川は、調査を始めて三年が経過した頃に、水俣地域の人々は、聞き取り調査の中で研究者に対して「土産を持たず」ことに気づいたと言う。「土産を持たず」とは、研究対象者が真偽の入り混じったエピソードを、サービスとして話すことである。研究者の側は綿密な話が聞けたと思いつつも、調査を進めていくうちに語られたエピソードが嘘であることに後から気づくのである³²。この背景には、水俣病が発生して以来、非倫理的な聞き取り調査や取材が繰り返され、水俣地域の人々が深く傷つけられてきたということがある。水俣地域で研究者が、研究対象者の不信を越えて、深い聞き取り調査をするためには、アプローチを変えなければならない。

その一環として、色川は水俣地域の研究では、地域の特色を踏まえた上で、アポイントメントを重視せずに飛び込みで聞き取り調査に行くようになった。通常であれば聞き取り調査は事前に連絡をしておかなければならない。その方法を水俣地域の人々との交流の中で変えて行ったのである。こうして苦心の末に調査法を確立した色川、そして同行した羽賀の聞き取り調査は、「聞き書き」

²⁹ 色川編 [1983]、下巻、p.448。

³⁰ 色川編 [1983]、下巻、p.462。

³¹ 色川編 [1983]、下巻、p.462。

³² 色川 [1994]。

という形で保存され、当事者の語りを残す重要な記録となった³³。

(4) 宗像・鶴見による「人と自然との関係」の発見

(3) で述べたように、水俣地域の人々との深い関係が築かれていく中で、宗像と鶴見は「人と自然との関係」を聞き取り調査を通して発見していくことになる。ここでは、両者の「調査」と「発見」を見ていこう。

①宗像の「調査」と「発見」

宗像は、調査団の活動の初期から単独行動を取り始める。一人で特定の患者や患者家族の自宅に通い詰め、水俣地域の人々の生活に入っていく。宗像は当時の調査について、「水俣の方々とお会いして、単純な質問をさせていただくということではなく、むしろ、お邪魔にならないように毎日の実際の生活に参加させていただきました³⁴」と語っている。具体的には、宗像は「お薬を病院に受け取りにゆく。針医者、按摩を一緒に尋ねる。子供の進学相談相手になる。甘夏栽培農園で給水、肥料の話をする。ご先祖のご供養、それに、袋・茂道地区の中学校がソフト・ボール大会で優勝した時は、その祝賀会で飲めない酒を飲みました³⁵」と語っている。こうした宗像の水俣地域の人々への関わりの中で、対象者は質問しなくても水俣病で亡くなった家族の話进行細かく語ってくれるようになる³⁶。この経験について、宗像は次のように述べている。

ふりかえって見ると、このように自然にほぐれるようにお話を伺ったのが一番内容も深いものだったと思います。こんな悲しい体験をした人々に社会学の調査項目による質問なんて、非常識だし、失礼だし、絶対に駄目ですよ³⁷。

以上のように、宗像が行ったのは「研究者としての立場を放棄すること」である。不信を抱えた人たちの中に入っていく、生活経験を分かち合う中で、相手が語り出すのを待ったのである。

このように宗像は、息の長い研究活動をしていく中で、水俣地域の人々の「人と自然との関係」を浮かび上がらせていく。そして、宗像は、水俣漁民の世界観を分析し、かれらの「意識の底に長年にわたって沈潜してきた「世界と自分」、「自然と私」、あるいは「海とわれわれ」との魂のかかわりには、かなり、根深

³³ 羽賀 [1985]。

³⁴ 宗像 [1983]、p.203。

³⁵ 宗像 [1983]、p.203。

³⁶ 宗像 [1999]、p.37。

³⁷ 宗像 [1999]、p.37。

い絆ができている³⁸」という確信を抱くようになるのである。

②鶴見の「調査」と「発見」

鶴見は団員の中でも少数派の女性研究者であり、明るく華やかな人柄から「賑い神さん」と呼ばれた³⁹。鶴見は研究対象者に気に入られ、「ボラ漁のことを熱心に聞いているうち、「元気のよか姉さんじゃ、ボラカゴをあげましょか」といわれ⁴⁰」たこともあった。これらのエピソードを見ていくと、鶴見が水俣地域の人々と生き生きとした関係を結ぼうとしていたことが伝わってくる。

鶴見はこの水俣地域での調査の経験を通して「自分が何か偉い人で学問してきて人を裁くとか調べるとか、そういうものではないということがだんだんわかってきた⁴¹」と述べている。さらに、「お話を謙虚にうかがう。こっちが無くなってお互いお話しする（中略）そして、お話をうかがうことを通して、私が何を学んだかという、つまり、自分の学問によって人を分析する、社会を分析するというのが社会学なのですけど、それがここではできないということがわかったのです⁴²」と結論づけている。鶴見も宗像と同じく、「研究者としての立場を放棄すること」を行った。その結果、鶴見は次のことを学んだと言う。

患者さんたちから学んだことは、自分が肉体的にも、心も魂も傷ついた訳ですが、それを癒やしていく、それをどうやったらできるかといえ、自然とのつきあいを回復していくことを通してしか癒やしていくことはできないということ。そのことが、私は、初めてわかったのです⁴³。

上のように鶴見は水俣地域の人々と深く関わる中で、「人と自然との関係」を発見している。特に水俣病の患者が生きていく上では「人と自然との関係」が重要な役割を果たしていることに気づいたのである。

(5) 水俣地域の人々との「交流」と「断絶」

ここまで見てきたように、調査団は初期の混乱はあったものの、時間の経過とともに、水俣地域の人々との深い関係を築いていったように見える。羽賀は聞き取り調査の経験を通して、以下のように述べている。

³⁸ 宗像 [1999]、p.13。

³⁹ 「調査団ニュース」No.39、1980年4月28日。

⁴⁰ 色川編 [1983]、下巻、p.457。

⁴¹ 鶴見 [1998]、pp.31-32。

⁴² 鶴見 [1998]、pp.31-32。

⁴³ 鶴見 [1998]、p.31。

人びとは孤独なのだった。ことにおじいさんやおばあさんたちは、家族さえ（だからこそなのだが）聞かないその一代記というものを私たちに語る時、彼ら自身の生涯を再確認していた。生きていた、あるいは生きていた証しを語ることによって私たちに手渡し、歴史の上に自分という存在の刻印を、目に見えなくともたしかかな形として残そうとしていた⁴⁴。

上で羽賀が述べるように、水俣地域の人々は外部から来る人間を切望していた。それは、この地域に生きた証を残すためである。このとき、まさに、石牟礼が言うように調査団は「使者」の役割を果たした。水俣地域で起きた凄惨な出来事を聞き取り、書き残し、水俣の外部の人々へと伝えて行くための使者である。

他方、外部からの「侵入者」に傷つけられてきた水俣地域の人々の不信と断絶は、最後までなくなることはなかった。その証左のように、羽賀は調査の終わりで起きた団員と赤崎とのやり取りを記録している。赤崎は調査団が打ち解けた議論で盛り上がっていると、団員に向けて「先生たちは泣くような目であったことがないでしょう、食えなかったことなんかないでしょう⁴⁵」と発言したのである。この一言で一同が凍りついたというエピソードが「調査団日誌」で描かれている。

また、羽賀によれば調査団の研究活動は必ずしも結束が固いとは言えなかった。調査団の団員の主体性が薄く、合宿も途中で帰ったり、宿にこもりきりだったりするものもいた。東京での研究会も盛り上がり欠けたことを羽賀は指摘している。それに対して、団員たちは報告書の作成についてばかりを話題にしていた。羽賀はこの研究状況に対して、「この程度で良いのだろうか⁴⁶」と「調査団日誌」に綴っている。調査団は最後まで水俣地域の人々との断絶を孕んだまま活動を終結したのである。

以上のように、調査団の「現地での活動」はアンビバレントな側面を持っていた。一方では団員たちは自らの学問的態度を改め、水俣地域の人々から学ぼうと、無心に関わって行った。それが可能になったのは水俣地域の人々には自らの経験を「記録に残して欲しい」という外部者への期待と切望があったからである。外部者と内部者の交流に対する需要と供給が一致した時に、「団員と水俣地域の人々との関係」は深められて行った。その関係の中で鶴見や宗像が発見したのは、水俣地域の人々が培ってきた「人と自然との関係」である。他方

⁴⁴ 色川編 [1983]、下巻、p.464。

⁴⁵ 色川編 [1983]、下巻、p.466。

⁴⁶ 色川編 [1983]、下巻、p.467。

で、団員たちは「水俣地域の人々の拒絶」や「かれらとの差異」の自覚を迫られ続ける。団員が、どこまでも水俣地域の外部者であるという線引きは変わらなかった。しかしながら、鶴見や宗像が発見した「人と自然との関係」もまた、水俣地域の人々との断絶を直視することから、可視化されたのではないか。次章では、鶴見と宗像の研究成果を中心に、調査団の研究の内容について概観を行いたい。

第2章 不知火海総合学術調査団における環境思想の展開

第1章でも述べたように、調査団の研究目的は「人と人との関係」を中心に置いた共同体の分析にあった。団長の色川は、調査団の活動が終結して「共同体は崩壊した」という結論を出している。そして、共同体の再生は「経済面」と「政治面」では立ち直りは不可能だと断言した⁴⁷。「経済面」では小島麗逸の研究によって、すでに流通システムが整備された水俣社会では、住民は水俣外の食料品を購入している。競争力を持たない水俣の地場産業では対抗できないと分析された⁴⁸。「政治面」では水俣は保守派の影響が強く、患者中心の自治体制になるとは考えにくい。そのため、水俣のコミュニティ再生は期待できないと分析された⁴⁹。色川が調査団の始動時に構想していた、「経済面」と「政治面」からのアプローチによる共同体研究においては、水俣の地域再生は不可能であるという絶望的な結論しか導き出せなかったのである。

他方、色川は水俣病患者の人間性の中に水俣の地域再生の萌芽を見出している。色川は次のように述べる。

最近になって私に分りかけたことは、あの人たちは、先祖代々不知火の海に抱かれてくらし、そこに人の言葉ではない、春を伝える風や夏を告げる潮の音を聞きながら、大きな生命に溶けこみ、包まれ、祖霊に見守られて生きてきたという強い信念を持っているのだということです⁵⁰。

以上のように、色川は調査団の研究の成果として、水俣地域の人々が持つ「強い信念」の発見を挙げている。これは、自然の中で生き、人以外の生命に溶け込んで暮らしている当事者の非言語的な「環境思想」だと言える。この環境思想を持つ水俣地域の人々が、新たな地域再生の担い手になると色川は考えた。その水俣地域の人々の環境思想を掘り下げて研究したのが宗像と鶴見である。

⁴⁷ 色川 [1983]、p.200。

⁴⁸ 色川 [1983]、p.200。

⁴⁹ 色川 [1983]、p.201。

⁵⁰ 色川 [1983]、p.203。

以下では両者の『水俣の啓示』に収録された論文を見ていきたい。

①宗像巖「漁民の世界観構造」

宗像は『水俣の啓示』で、論文「水俣の内的世界の構造と変容：茂道漁村への水俣病襲来の記録を中心として」を執筆している。この論文は5章立てになっており、各章は「序論」「不知火海自然と漁村生活」「漁民の世界観構造」「茂道漁村への水俣病の襲来」「再生への胎動」という見出しがつけられている。ここでは、「漁民の世界観構造」を見ていきたい。宗像は、水俣地域の人々が「人と自然との関係」の中から構築する「世界観」の構造分析を行っている。

宗像の論文によれば、水俣の漁民の世界観は三層構造になっている。第1層は「人と自然との関係」である。水俣の漁民にとって、不知火海の自然は「象徴的な美しさ⁵¹」として機能している。かれらにとって、海は海産物がとれる「生活を支える場⁵²」であると同時に「心に存在の方位感覚と実存的なやすらぎを与える⁵³」場である。宗像は漁民にとっての不知火海を以下のように表現している。

（前略）不知火の海が荒々しい様相をみせるのは稀れで、一年を通じて穏やかな日が多い。外洋漁民の海自然観に比べると、この内海漁民にとっての海は、優しく生命を育む母性的自然⁵⁴である。海は「生きている自然」であり、潮の流れ、風、太陽、月の光線をあびて千変万化の画像をくりひろげている。茂道湾や周辺の袋裏、湯堂の沿岸では魚介類の孵化がつづき、稚魚の群れは静かな海面に新しい生命の胎動をうかがわせる漣を立てている⁵⁵。

上で宗像が述べているように、水俣の漁民にとって不知火海は、生命が無限に再生を繰り返す象徴世界を具現化した像なのである。宗像によれば、漁民は「このような「自然の語りかけ」を聞きながら生活し、いつのまにかこの世界特有の宗教的感性を心に抱くようになってきている⁵⁶」のである。すなわち、水俣の漁民は「人と自然との関係」の中で生きる経験を元にして、独自の「生命の連続観」を基底に置く世界観を、魂の次元で作り上げるのである。

第2層は、「人と人との関係」である。宗像によれば水俣の漁民の人間関係は、第1層の「人と自然との関係」の上に連続的に形成されている。不知火海の魚

⁵¹ 色川編 [1983]、上巻、p.107。

⁵² 色川編 [1983]、上巻、p.101。

⁵³ 色川編 [1983]、上巻、p.101。

⁵⁴ ここで宗像は「母性」という言葉を使っているが、内実には触れていない。また、宗像は胎児性水俣病患者の「少女」の無垢性についてもこの論文で言及している。これらの宗像の論考はジェンダーの視点からの再検討が必要であるが、ここでは割愛する。

⁵⁵ 色川編 [1983]、上巻、p.101。

⁵⁶ 色川編 [1983]、上巻、p.101。

たちは、外海から海流に乗ってやってきて、内海で産卵し、稚魚から成魚へと成長し、再び外海に出ていく。その意味で不知火海は生命の流出入の場である。この生命の連続性を中心に据えた世界観が、人間同士の世界にも延長されている。それに加えて宗像は、「漁民の世界観」が「キリスト教の世界観」と大きく異なることを指摘している。キリスト教の世界観では、個人は死んだ後も「個としての自己存在」を永続させると考えられる⁵⁷。他方、漁民は先祖供養を通して、人間も死んだ後は不知火海の生命の一部に還っていくと考える。その意味で漁民にとって「個人は永遠性を持つ自然生命体のなかから過渡的に現れ、やがて再び自然に回帰してゆくものと感じられている⁵⁸」のである。漁民は、自らも魚たちと同じように、死後は靈魂となって不知火海へと回帰していく感覚を持っているのである。宗像はこの漁民の感覚を以下のように述べている。

不知火海の漁民の靈魂は、この世の命を終えると不知火の海を中心とする自然の懷にむかえ入れられてゆく。最終的に死者の靈魂が自然靈のなかに融合一体化されてゆくまで、この世に残された者と死者の靈とのあいだには親密な魂の絆が保たれている。この世からもう一つのこの世に立ち帰ってゆく靈魂は、しばらくのあいだ去り難いかにように不知火海にとどまっているのである⁵⁹。

以上のように、漁民にとってあらゆる生命は連続し、繋がっているものとして感知されている。それゆえ、死後も「人と人との関係」も断ち切られることなく「もう一つのこの世」として永遠に続いていくのである。それと同時に、水俣の漁民は、強烈な「個」を確立している。宗像によれば「茂道で出会う漁民の人間的印象は、個性的で活力に溢れ、しばしば強烈な存在感に満ちている⁶⁰」のである。その意味で水俣の漁民は、魂の次元では緊密な人間関係を築きながらも、日常生活では自立した存在なのである。その理由として、宗像は漁民が漁の上では競争関係にあり、「自分自身の経験で漁具を整え、漁法を考案し、出漁の判断をする⁶¹」ことを挙げている。こうして自律的に生活の糧を得ている漁民は、独立性が高く、行動的である。以上のように、漁民の「人と人との関係」は「人と自然との関係」に支えられており、「独立した個」がありながらも「緊密な共同関係」を結んでいるのである。これらの世界観が水俣漁民の倫理的行為の源泉となっている。

⁵⁷ 色川編 [1983]、上巻、p.109。

⁵⁸ 色川編 [1983]、上巻、p.109。

⁵⁹ 色川編 [1983]、上巻、p.111。

⁶⁰ 色川編 [1983]、上巻、p.113。

⁶¹ 色川編 [1983]、上巻、p.111。

以上の、水俣の漁民の世界観の第1層と第2層に対して、第3層は全く異なる次元にある。第3層は「交換の関係」であり、物的豊かさに貢献するような、経済利得を元にした資本主義的な関係である。宗像は、近代化によって産業発展が進むと第1層と第2層は縮小し、第3層の拡大に押しつぶされていくと考えた⁶²。物質的な豊かさと引き換えに、世界観の基盤となっていた「人と自然との関係」が揺らいで不安定になり、「意味世界が不鮮明化してゆく⁶³」のである。水俣病がもたらしたのは健康被害だけではなく、漁民の「世界観の危機」であった。しかしながら、宗像は論文の中で、水俣病発生の経緯と患者の行動を分析し、以下のように述べる。

(前略) 受苦を経てきた漁民の言葉には、伝統的な自然連続観に内在する純粹倫理に基づいて、受難の意味を問い、不条理と思われる水俣病の受苦に耐えることが、人間の精神生活ならびに社会生活に、なんらかの形で貢献できるという答えが与えられるならば、自己犠牲もあえて厭わないという透明な倫理観がうかがわれる。そこにはさらに、地球自然が有限であり、個人の生命も有限であるからこそ、自然との共生を尊重し、この世における人間と人間との魂の出会いが、掛け替えのない意味に満ちたものと感知する心もうかがわれる。そこには虚無的思考は全く見出されないのである⁶⁴。

以上のように、宗像は水俣の漁民は、その独自の世界観を失わなかったと結論づけている。水俣病によって健康被害を受け、目に見える形では共同体の「人と人との関係」がずたずたに引き裂かれても、「人と自然との関係」から培われた「生命の連続性」への信頼は失われなかった。それゆえ、魂の次元で「人と人との関係」は保たれ、再び人間関係の修復へと向かうことができる。こうした「人と自然との関係」に世界観の基底を持つ水俣地域の人々が、今後の地域再生を担っていくと宗像は考えたのである。

②鶴見和子「内発的發展への担い手」

鶴見は『水俣の啓示』で「多発部落の構造変化と人間群像」と題する論文を執筆している。この論文は二部に分かれている。第一部は「多発部落の定住と漂泊の構造と変化」である。鶴見は第一部で、統計調査と聞き取り調査のデータを駆使して、水俣地域の人々が「定住者」と「漂泊者」の二つの層に別れていることを明らかにする。両者は「じごろ」と「ながれ」と呼ばれ、地域社会

⁶² 色川編 [1983]、上巻、p.113。

⁶³ 色川編 [1983]、上巻、p.113。

⁶⁴ 色川編 [1983]、上巻、p.147。

の人間関係の鍵となる概念である。鶴見は第一部において、これらの分析を通して、水俣地域の「人と人との関係」について考察している。他方、第二部は「内発的発展への担い手」である。鶴見は第二部で、水俣地域の人々は「人と自然との関係」を経由して、今後の地域再生の担い手となっていることを指摘した。ここでは、第二部の議論を見ていきたい。

鶴見が第二部で焦点を当てるのは、水俣地域の人々が「自然との対話をとおして自立した主体を形成する過程⁶⁵」である。鶴見は水俣地域の人々と深く関わる中で、「自然破壊とは、海や山や川や鳥や魚や猫たちの破壊だけではなく⁶⁶く、「人間の身体の破壊もまた、自然破壊であることがわかった⁶⁷」と述べている。公害問題としての「水俣病」は、加害企業チソと、健康被害を受けた水俣病患者の間の「人と人との関係」において起きている。他方、その健康被害もまた、ほかの動物や環境を含む自然破壊の一部なのである。鶴見は、それに気づいた一部の患者は「現代の医学が、水俣病を治癒する能力のないことを知ったとき、自らの創造性に依拠して、内なる自然の回復をはかった⁶⁸」ことを指摘し、これを「最も根源的ないみでの、自力更生とよびたい⁶⁹」と主張している。鶴見は「自力更生」という用語を孤立無援な状況にある農民が発展へ賭ける気構えを意味する言葉として使い、「水俣病患者の自己回復への努力は、それらのすべての基底となる、人間の自立への主体形成のいとなみとしての自力更生である⁷⁰」と述べた。水俣病患者は各人が異なる病状を持っており、同じ回復方法が使えるわけではない。その意味で、同じ患者であっても孤立し、孤独の深淵を抱えているのである⁷¹。そのため、水俣病患者は各人が自然と向き合う中で回復の方法を模索して行かざるを得なかった。この過程において、水俣病患者は強烈な個性を持った個人としての主体を確立するのである⁷²。

鶴見がその例としてあげるのは三人の水俣地域の人々である。一人目は水俣病患者の浜元二徳である。浜元は独学で水俣病の治療法を考案している。医師に提案して実験的に未知の薬剤を投薬し、回復を模索した。また、浜元の自宅には薬草が庭いっぱい植えられていた。浜元は自らの身体と向き合う中で、

⁶⁵ 色川編 [1983]、上巻、p.218。

⁶⁶ 色川編 [1983]、上巻、p.213。

⁶⁷ 色川編 [1983]、上巻、p.213。

⁶⁸ 色川編 [1983]、上巻、p.213。

⁶⁹ 色川編 [1983]、上巻、p.213。

⁷⁰ 色川編 [1983]、上巻、p.214。

⁷¹ 色川編 [1983]、上巻、p.213。

⁷² 他方、鶴見は地域の自然からのみ、主体が形成されるのではないとも論じ、「裁判と自主交渉をとおしての自立的な主体形成と、合力のかたちがなければ、それは生まれることはなかったであろう（色川編 [1983]、上巻、pp.212-213.）」と指摘している。この公害の「被害-加害関係」における闘争（法廷内対話と法廷外対話）がなければ、「人と自然との関係」に基盤を持つ主体の形成はないという論点は非常に重要であるが、紙幅の関係上、本稿では割愛する。

自己治療を試みていくのである⁷³。二人目は田上義春である。田上は劇症型の水俣病患者であり入院していたが、「他律的な訓練では、水俣病患者の機能回復はできないという立場⁷⁴」をとり、退院後はリハビリセンターへの入所を拒んだ。代わりに、田上は養蜂を始め、蜜蜂と関わる中で「生きるもののよさがわかった⁷⁵」ため、自宅で動植物を養うようになった。鶴見は、田上の自宅を「多彩な生きものの共棲する小宇宙⁷⁶」であると表現している。そして、鶴見は田上が自宅での動植物との共生生活から「外なる自然とつきあいながら、内なる自然である身体の働きを回復させた⁷⁷」と考察している。

三人目は鬼塚巖である。鬼塚はチッソの労働者であり水俣病患者ではなかった。だが、鬼塚もまた、自然との対話を通じた主体の形成を試みていると、鶴見は指摘している。鬼塚は「自然は生きている。工場は生きていない⁷⁸」と述べ、公害問題について、生命のないものが生命のあるものを殺していくことであると考へた。さらに鬼塚は、そのことを「カメラを通して語りかけたい⁷⁹」と述べている。その鬼塚が撮影したのは「たうちがね」と呼ばれる蟹だった。鶴見は、鬼塚が何時間も我慢強く干潟で蟹と向き合っただけ距離を縮めていき、ついには靴にあがってきた蟹の写真を撮ったエピソードを紹介し、鬼塚の「ガネどんと話のできる人間になりたい⁸⁰」という願望を描き出した。鬼塚は後日、蟹が語りかけてきたことを、水俣弁で「昔（マエ）は、ココはよかところじゃたばい⁸¹」と豊かに表現している。鬼塚は、人間だけではなく水俣に住む生きものたちも、水銀汚染によって豊かな環境を失ったということ、干潟で蟹に耳を傾ける中で明確化し、表現活動に展開していったのである。鬼塚は第4章で詳述する「不知火海百年の会」の会長としても活動を行っており、独自の表現者としての主体を確立していった。

以上の三人を挙げて、鶴見は水俣地域の人々は次のことが共通していると述べた。

（引用者注：共通するものは）自らの身体を、自分たちの住む地域の自然の一部と見なし、内なる自然と外なる自然との対話と共生をとおして、自立した判断と行動の主体を形成するという姿勢である。地域の自然に深く根をお

⁷³ 色川編 [1983]、上巻、pp.214-215。

⁷⁴ 色川編 [1983]、上巻、p.216。

⁷⁵ 色川編 [1983]、上巻、p.217。

⁷⁶ 色川編 [1983]、上巻、p.217。

⁷⁷ 色川編 [1983]、上巻、p.218。

⁷⁸ 色川編 [1983]、上巻、p.219。

⁷⁹ 色川編 [1983]、上巻、p.219。

⁸⁰ 色川編 [1983]、上巻、p.220。

⁸¹ 色川編 [1983]、上巻、p.220。

ろしたこのような自己訓練法は、内発的發展への担い手の主体形成の一つの様式であるといえることができる⁸²。

上のように、鶴見は自然との対話と共生の中から、新たな地域再生を担う主体が形成されていることを指摘した。この鶴見が指摘する主体は、「自由で自律的な個人」としての近代的自我とは異なる。近代的自我は、共同体の中で「私とは何か」を問い、「人と人との関係」の中で見出される主体である。他方、水俣地域で形成された主体は、「自らの身体」や「身近な動植物」、さらに「見過ごされてきた小さな生きものたち」との関係、すなわち「人と自然との関係」の中で見出される主体である。水俣病を経験したからこそ、再び自然と向き合う中で、水俣地域の人々は新たな主体を確立していったのである。この主体こそが、近代産業によって破壊された水俣地域を修復する力を持つのだと、鶴見は考えたのである。

以上のように、宗像と鶴見に共通するのは、水俣地域の人々の新たな主体を提起したことである。その主体は、水俣病が徹底的に破壊した人間の身体や共同体を再生させる力を、「人と自然との関係」の中から得ている。共同体の再生が経済的・政治的に不可能である場合にも、こうした主体は自然と向き合う中で絶望せずに希望を見出していくことができるのである。この水俣地域の内部で生まれてきた主体の持つ環境思想が、外部からやってきた調査団の研究を通して、可視化されたと言えるだろう。ここで、水俣地域を訪問した調査団の外部者としての存在意義が明らかになるのである。

それと同時に、調査団と水俣地域の人々の断絶が埋まることはなかった。どんなに深く水俣地域の人々の魂の世界を見聞きし、学ぶ姿勢に徹したとしても、団員は外部の他者であることに変わりはない。たとえば、宗像は1999年に水俣地域の人々について次のように述べている。

(前略)この世界の人々が胸を開いて、私を受け入れてくださったことは、とても、うれしいことなんです。でも、この世界の中には、完全に引き込まれるということは、やはり、ないんだと思います。その意味で、私はひどく孤独なんだな。死にやすい、そして、子供たちの高い声やおじいさんの思い出ばなしが語られ、山おろしの風で木々がゆらいで、夜になって月が出ると海が一面、銀色なんだけど、一日の調査が終わって、水俣の旅館の自分の部屋に戻り、一人になると、私は独りぼっちなんだな⁸³

⁸² 色川編 [1983]、上巻、p.221。

⁸³ 宗像 [1999]、p.46。

上で宗像が表現しているように、外部者は内部者の世界を観察し、分析し、可視化することはできるが、完全に引き込まれることはなかったのである。また、鶴見は2002年に石牟礼道子との対談の中で、この水俣についての論文を次のように振り返っている。

いや、論文にはほんとに魂は入ってないと思う。自分は魂をこめて書いたつもりでも、まだ私の魂はだめだったんだよ、あのころ。いま少しずつ浄められているんじゃないかな⁸⁴。

上の発言の当時、鶴見は闘病中であった。鶴見は「倒れてから私はもう少し水俣に近づけたように思う⁸⁵」と述べ、調査団に参加していた頃は、全く水俣地域の人々のことを論文で表現できていなかったと回想している。このような宗像や鶴見が述べる、水俣地域の人々との断絶は、活動初期の調査団への「不信」に起因するものではない。水俣地域で生き、身体に痛苦を引き受けた人々の魂の世界へは決して到達できないという、本質的な断絶である。団員は聞き取り調査を通して水俣地域の人々との深い関係を築きながらも、その奥底にある断絶が埋まらないことも明確に自覚していた。外部者と内部者は決して一体化できないのである。

他方、外部者は内部者と一体化できないからこそ存在意義があるとも考えられる。石牟礼は『水俣の啓示』が発行された後のシンポジウムで、調査団について「外側からきて下さる、旅の方がきて下さるのは、とっても大切なこと⁸⁶」であると語っている。その理由を、水俣地域の人々にとっては「不知火海の自然にしても、私たちはその中にいるので、何でも当然のこととして受けとめてしまっ⁸⁷」いるため、「みんながおよそ同じような感じでいて、あまり意識しないですんでしまう⁸⁸」からであると説明する。すなわち、水俣地域の人々にとって「人と自然との関係」を中心とした環境思想は前提であって、不可視化されているのである。その上で石牟礼は、調査団が水俣を訪れることは「私たちにとってひとつのよみがえりの転機になるともいえます⁸⁹」と述べている。このように石牟礼は、調査団は外部者として内部者と断絶しているからこそ、内部者の思想を抽出していくことができると考えているのである。

以上のように、調査団は内部者と外部者の断絶を残したまま、新たな環境思

⁸⁴ 石牟礼・鶴見 [2002] p.102。

⁸⁵ 石牟礼・鶴見 [2002]、p.135。

⁸⁶ 門脇・鶴見編 [1983]、p.205。

⁸⁷ 門脇・鶴見編 [1983]、p.205。

⁸⁸ 門脇・鶴見編 [1983]、p.205。

⁸⁹ 門脇・鶴見編 [1983]、pp.205-206。

想の提起に成功した。このプロセスは、はじめに内部者と外部者がコミュニケーションの次元での「断絶」から「交流」に至り、次に魂の次元での「交流」を試みたが、再び「断絶」していったものとして捉えることができる。そのことにより、魂の次元における水俣地域の人々の「人と自然との関係」を可視化する道を拓いていったのである。他方、これらの思想研究で発見された「人と自然との関係」は抽象論にとどまっている。より実体的な水俣地域の人々の「人と自然との関係」はここでは明らかにされていない。この調査団の課題は、後継の第二次不知火海総合学術調査団へと引き継がれていくことになる。次章ではその活動を見ていきたい。

第3章 第二次不知火海総合学術調査団の活動

色川が団長を務める調査団は、1976年に活動を開始して、1983年の報告書『水俣の啓示』の出版で終結している。他方、第二次不知火海総合学術調査団（以下、「第二次調査団」と略す）が1981年に結成された⁹⁰。第二次調査団は、1977年から1979年に第一次調査団が受けていたトヨタ財団の研究助成金の継続助成を受けて、研究活動を行った。団長は生物学を専門とする最首が務め、第一次調査団が棚上げした「環境調査班」による海洋調査を中心に据えた。事務局は羽賀が継続して務め、活動報告のレターを発行している⁹¹。

第一次調査団長の色川が始動時の研究対象を「人と人との関係」を中心に据えたのに対して、第二次調査団長の最首は研究対象を「自然」に定め⁹²、「人と自然との関係」を視野に入れている。また、羽賀の作成したレターのタイトルは「海と人」である。ここでも、明確に「人と自然との関係」が研究活動の中心に据えられていたことがわかる。しかしながら、第二次調査団は成果報告書が出ていないため、これまで活動の全貌は明らかになっていなかった。そのため、断片的な資料から第二次調査団の研究活動の概要を推察したい。

①第二次調査団の研究資金

第二次調査団はトヨタ財団から研究助成を受けることになるが、第一次調査団のおよそ半額の480万円であった。自然科学を中心とした第二次調査団の研

⁹⁰ 団員は桑原連、田口正、最首悟、原田正純、内田雄造、熊本一規、長谷川宏、西弘、石牟礼道子、羽賀しげ子、水野公寿、角田豊子である。

⁹¹ レターはNo.1～No.12（1981年7月30日～1983年9月28日）を入手できたが、それ以降の活動については不明である。このレターだけが、第二次調査団の活動経緯を継続的に記録した資料だと思われる。

⁹² 第二次調査団は「社会環境班」も設置され、社会科学の分野の研究者も参加したが、当時の機関紙でも1983年6月26日に「自然科学にウェイト」と報じられている（水俣病を告発する会〔1986〕、p.559）。

究費用としては十分な金額ではなく、羽賀もレターで「あっちを切り詰めこっちを節約し均等に使えるように配慮します⁹³」と書いている。また、最首は1981年8月8日の手紙の中で、調査用の船の手配を依頼する際に、自費での調査であることを先方に打ち明けている⁹⁴。第一次調査団よりも金銭的には厳しい調査となった。

②第二次調査団の調査方法

第二次調査団は自然科学を中心としたため、調査方法も第一次調査団と大きく異なっている。最首は第一次調査団では女島の漁民の漁法についての聞き取り調査を綿密に行い、水俣地域の人々との深い関係を築いていた。他方、第二次調査団の団長としては、現地での調査について自然科学のデータを収集するために中立的な立場をとっている。そのため、患者支援団体とも公式的な繋がりを持たないことを関係者への手紙の中で明言した⁹⁵。最首のこの手紙から、第二次調査団は研究活動の上で、水俣地域の人々との情緒的な繋がりを意図的に排そうとしたことわかる。

さらに自然科学の調査では、不知火海の底生生物（ベントス）の採集が主に行われた。重金属分析の専門家の田口正によると、この調査の目的は「ヘドロ処理工事によって、海にどのような影響が現れてくるのかをベントス（底棲生物：ヒトデ、ゴカイ、エビ等）の住み方や海底に沈殿した金属の分布を5年、10年という期間で見てゆくというもの⁹⁶」である。生物学者の桑原連は、底生生物に焦点を当てたのは「①海域の広域的な特性を知る②海域を幾つかに区分してそれぞれの特質を検出する③汚濁の伝播経路の検討上、任意地点の海洋学的構造を知る⁹⁷」ためであると第二次調査団の研究会で解説している。

この底生生物の調査では研究者の縦型の組織が活用され、軍隊方式で行われた。団員の角田豊子は、最首が調査の協力者を「兵隊」と呼んでいることや、桑原や田口が学生を怒鳴りながら海洋調査をしていることを報告している⁹⁸。こうした調査は、当時の自然科学では慣例的なものであったのだろうが、第一次調査団の水俣地域の人々の生活の中に入って行くような聞き取り調査とは全く異なるものである⁹⁹。

⁹³ 「海と人」No.3、1981年11月20日。この号では研究会の定例会のお知らせに「今後お弁当はできません」と注記がつけられており、すでに予算が切り詰められていたことが窺える。

⁹⁴ 手紙、最首悟、[1981]。

⁹⁵ 手紙、最首悟、[1982]。

⁹⁶ 「海と人」No.1、1981年7月30日。

⁹⁷ 「海と人」No.2、1981年9月28日。

⁹⁸ 1981年9月25日の豊田豊子「大和屋の朝」と題したエッセイの中で描かれている。（水俣病を告発する会 [1986]、pp.482-483）。

⁹⁹ ただし、水俣地域の人々と団員との交流がなかったわけではない。たとえば、桑原が単身で

それに対して第二次調査団の内田雄造や長谷川宏は水俣の市街の散策をすることで、独自の社会科学調査を試みているが、自然科学者との共同調査の記録はない。団長の最首は理念としては「医学班とか社会科学班とか生物班とかいうのはトヨタ財団の助成を得るための名目であり、分けて考えているつもりはない¹⁰⁰」と語り、「境界みたいなのはなるべくぼやかしていきたい、またはつぶしていきたい希望があります¹⁰¹」と語っているが、現実的な両者の接合は、調査方法の差異も含めて、困難であったと考えられる。

③第二次調査団の研究成果

第二次調査団は最終的な報告書を出していないため、トヨタ財団に提出された1982年の「中間報告¹⁰²」が主な資料となる。「中間報告」では、「Ⅰ.都市としての水俣」「Ⅱ.不知火海の漁業労働と健康調査」「Ⅲ.不知火海の底生生物と底質中の重金属」の三つの項目が立てられている。これらの項目は、「社会環境班」「医学班」「環境調査班」にそれぞれ対応している。一項目めの「社会環境班」が研究を行なった「都市としての水俣」は、都市計画を中心に今後の水俣社会の再生を検討することを目指しているが、レジュメやレポート、資料の寄せ集めであり、論の形を成していない。二項目めの「医学班」が研究を行なった「不知火海の漁業労働と健康調査」は、医師の原田正純が調査票を作成し、水俣病が患者の労働スタイルにもたらす影響を研究している。劇症型患者の重篤な症状だけではなく、しびれやめまいなどの比較的軽症の患者の症状も、重大な生活障害を引き起こすことを明らかにしている。ただし、この研究は他分野の団員とは独立して行われた。第二次調査団の主となるのは三項目めの「環境調査班」の「不知火海の底生生物と底質中の重金属」の研究であろう。

a) 底質中の重金属」の研究

「底質中の重金属」の研究はこの調査団の最重要課題であったと考えられる。最首は1980年に鬼塚巖と協力して行なった「ドベ最終調査で明神崎の内と外で同じ20ppmという奇妙な水銀値が出て、もう一度調べてみよう」と頭をひねっていた¹⁰³」た。この時点で、底質中の重金属の測定・分析に関心を持っていたと考えられる。

また、第二次調査団の「底質中の重金属」の研究の成果を知る手がかりとな

の調査中に水俣地域の人々と親しくなったエピソードが記録されている（「海と人」No.7、1982年10月26日）。

¹⁰⁰ 「海と人」、No.8、1982年11月30日。

¹⁰¹ 「海と人」、No.8、1982年11月30日。

¹⁰² 不知火海総合学術調査団 [1982]

¹⁰³ 「調査団ニュース」No.39、1980年4月28日。

るのは、1982年6月19日～21日に開催されたシンポジウム「環境における重金属とその生体影響」である。このシンポジウムはトヨタ財団が助成を行い、山懸登、土井隆雄、最首悟、田口正が主催した。プログラムは三部構成で、「生物試料による環境モニタリング」「不知火海の生物と重金属の汚染」「金属の生体影響—最近の動向と今後の展望—」となっている。シンポジウムの記録は『環境汚染へのとりくみ』と題して1983年に出版された¹⁰⁴。シンポジウムでは、水銀汚染に限らず海洋環境の重金属汚染の研究報告が行われ、自然科学の研究者が議論を行なっている。

このシンポジウムでは、国や行政機関の水俣病に関する科学調査の分析データが十分に公表されていないという問題が、次々と指摘された。たとえば、東京大学工学部の西村肇が「水俣湾における魚の水銀汚染と水銀の移行経路」の報告をした際に、最首がデータの入手経路を尋ねた。すると、西村は「これはたまたま手元にあったとしか言いようがありません¹⁰⁵」と答えた。それに対して最首は「つまり私たちには手に入らないというわけですね¹⁰⁶」と念押ししている。さらに公衆衛生院の田口正は「入手できないことは非常に問題があると思います¹⁰⁷」と述べ、政府の水俣病に関するデータが公開されておらず、研究が進まないことを指摘した。また、別の報告の会場でも、東海区水産研究所（現・中央水産研究所）の江平重男が1960年の不知火海の水銀調査について「心残りなのは、調査結果が公表されなかったことです¹⁰⁸」と述べている。江平によれば、水産庁は分析データの公表を控え、「ほとぼりが冷めてから、まる2年経って¹⁰⁹」印刷した。さらに江平は「当時の実験精度は非常に低」かったことを指摘し、不知火海の水銀のデータは「今日の方法ではおそらく2倍くらいの値になるのではないか¹¹⁰」と回想している。また、田口も「水産庁に電話帳のような厚さの魚の水銀データブックが眠っていて、コンピューターにかけるといふ話は聞いているんですが、その後解析は進んでいないようです¹¹¹」と付け加えた。第二次調査団で、最首や田口が自主的な海洋調査を実施したのはこのような状況を察知していたからだと推察される。

それに加えて、最首と田口は「環境科学の視点」をこのシンポジウムで打ち出している。両者は環境科学の視点から、「実験室で完結する自然科学研究」の枠を越え、「フィールドワークを主体とする自然科学研究」の可能性を示したの

¹⁰⁴ 山懸他編 [1983]。

¹⁰⁵ 山懸他編 [1983]、p.132。

¹⁰⁶ 山懸他編 [1983]、p.132。

¹⁰⁷ 山懸他編 [1983]、p.132。

¹⁰⁸ 山懸他編 [1983]、p.182。

¹⁰⁹ 山懸他編 [1983]、p.182。

¹¹⁰ 山懸他編 [1983]、p.182。

¹¹¹ 山懸他編 [1983]、p.182。

である。その背景には、最首が第一次調査団でのフィールドワークを通して、水俣地域の人々との信頼関係を築く難しさを痛感していたことがあるだろう。最首は「魚1匹採るにも現地の漁師の協力は必要だし、信頼関係を築くには、自分たちの目的意識をはっきりさせねばならない¹¹²」と述べている。水俣地域の人々との関係を抜きにした、自然科学調査はあり得ないと、最首はこのシンポジウムで主張したのである。最首の主張はシンポジウムの最終日の「総合討論」において、より明示的に述べられている。

(前略) 私自身、自分の人づくりの最中で、しかも同時に不知火海の調査にあたる若い人を養成しなければと考えている。しかし今の大学カリキュラムや、より狭く深くという研究者養成では、社会科学、人文科学、自然科学を包含し、はみだす環境科学者は生まれてこない。住民に対して、その生活・信条を尊重しながら、はっきりものをいい、かたや理不尽な行政と真正面から闘う研究者を投入しなければ、例えば不知火海沿岸住民と医学あるいは自然科学の不幸な関係を改善することはできません¹¹³。

以上のように、最首はこのシンポジウムで、「自然科学」を「社会科学」や「人文科学」と架橋し、共にフィールドワークを行う環境科学の構想を提示している。最首が、第二次調査団ではこうした環境科学の研究を実現させようとしていたことは間違いないだろう。他方、こうした最首の環境科学の構想について、自然科学者が全面的に賛同したわけではない。たとえば、北里大学薬学部の井村伸正は最首のコメントに対して「本当に私にはよくわからない¹¹⁴」と反論している。井村はフィールドワークをせずに、実験室にこもって研究を行ってきた自己の経験を挙げながら、水俣病について「自分なりにある程度のコントリビューションはしてきただろうと思っています¹¹⁵」と述べている。井村は環境科学者に必要なのは「思想」ではなく「問題意識」であり「真面目にサイエンスに取り組んでいれば、コントリビューションは当然できる¹¹⁶」と主張した。以上のように、このシンポジウムの記録に鑑みれば、第二次調査団による「底質中の重金属」の研究の理念と、それに対する自然科学者の反応を窺い知ることができる。

さて、実際の第二次調査団の「底質中の重金属」の研究について、1982年の「中間報告」を見てみよう。第二次調査団は、水俣湾で Hg (水銀)、Pb (鉛)、

¹¹² 山懸他編 [1983]、p.185。

¹¹³ 山懸他編 [1983]、p.291。

¹¹⁴ 山懸他編 [1983]、p.292。

¹¹⁵ 山懸他編 [1983]、p.292。

¹¹⁶ 山懸他編 [1983]、p.292。

Cr (クロム)、Co (一酸化炭素)、Fe (鉄)、Mn (マンガン)、Zn (亜鉛)、Cu (銅)、Cd (カドミウム) の分布調査を行った。この理由は、1977 年から水俣湾堆積汚泥処理工事が始まっており、水銀だけではなく、上記の重金属が八代海に流出し、環境汚染を起こす可能性があったためである。実際にデータを分析すると、水俣湾の水銀汚染は極めて大きい、他の重金属については「東京湾、大阪湾、瀬戸内海の値と類似している」という結果が出ている¹¹⁷。すなわち、この研究では不知火海の重金属汚染についての新たな発見はほとんど得られなかったのである。またこの結果は中間報告ということもあり、データの掲載が中心で専門家向けのレポートになっている。最首が構想した環境科学の理念とは異なり、他分野との連携する余地は、この時点の「底質中の重金属」の研究にはない。これらの「中間報告」の記載内容は、水俣地域の人々にとって、生活とかけ離れている。最首が提起した「水俣地域の人々と関わりながら探求する環境科学のあり方」は、この調査報告に現れているとは言えない。

b) 「不知火海の底生生物」の研究

それに対して、「不知火海の底生生物」の研究は比較的、水俣地域の人々にとって身近な研究である。桑原は、学生に調査で採集した底生生物の写真撮影をさせていた。その写真を用いて視覚的な研究発表を志している。第二次調査団の内部の研究会では、桑原は写真からスライドを作成し、シズク貝、ユムシの類、アカウオなどの実際の姿を見せながら報告した。例えば、「ワラスボはムツゴロウなんか襲って喰べるんですがこれは比較的深海にいて歯が鋭い。私も指なんかかまれて、アチなんて。目が退化してるのが特徴です¹¹⁸」などと、団員に対して詳しい底生生物の紹介をした。さらに桑原は、「ちらと見ただけですがベントスの種類がかなりあってそんなに死の海といわれるほどでなく、ほっとしてます」と語っている。桑原はこの研究において、T.A. Stepeson と Anne Stephenson の *Life Between Tidemarks on Rocky Shores* を参照し、底生生物の分布から不知火海の海洋構造を分析しようと試みたようである¹¹⁹。桑原の研究は公害問題を「生態系への影響から見る」というエコロジカルな視点を持っており¹²⁰、現代の環境科学にも通じる先駆的な試みであった。

だが、この研究成果について、1982 年の「中間報告」では「不知火海全域としては水質汚濁の影響は瀬戸内海、東京湾ほど底生生物の減少に関係していな

¹¹⁷ 不知火海総合学術調査団 [1982]、p.72。

¹¹⁸ 「海と人」、No.1、1981 年 7 月 30 日。

¹¹⁹ 相思社に収蔵されている桑原連のファイルに、T.A. Stepeson と Anne Stephenson の *Life Between Tidemarks on Rocky Shores* のコピーが綴じられている。

¹²⁰ 現在の環境科学でも不知火海（有明海、八代海）における底生生物の分布の調査研究は実施されており、県境変化の重要な指標として用いられている。

いように思われる¹²¹」と結論づけられた。その理由として、「外海水の侵入が大きな働きをしている¹²²」ことが挙げられている。すなわち、第二次調査団の底生生物の分布の研究は、水俣病の影響を実証できなかったのである。他方、底生生物の分布を調査することによって、人間の産業活動が環境へ与える影響を実証するという研究は、「人と自然との関係」を掘り下げる学際研究に繋がっていく契機を含んでいた¹²³。しかしながら、桑原の研究は単著論文等としては残っておらず、発展的な研究も続かなかった。

以上の第二次調査団の活動を概括して、一番大きな問題になるのは、学際的な議論が欠如していることである。第一次調査団は、常に内部での議論が絶えず、感情的なケンカまで起きていた。各分野の流儀を相互にぶつけあうことで、「学問とはどうあるべきか」また「研究者としての〈私〉はどうあるべきか」という根本問題が問われたのである。その中から生まれてきたのが、水俣地域の人々との深い関わりであり、「人と自然との関係」の発見であった。他方、第二次調査団は内部の議論がほとんど記録されていない。自然科学調査は行われているものの、その成果について社会環境班からコメントすら出ていないのである。各分野の研究者が個別に研究を行なった成果の寄せ集めでは、学際研究とは言えないだろう。もちろん、内部での断絶があまりにも大きく、議論にすらならなかったのかもしれない。しかしながら、最終的な報告書が出ていない以上、第二次調査団は研究を途絶させ、成果を出せないまま、空中分解に終わったと考えざるを得ない¹²⁴。

他方、第二次調査団は水俣地域の人々が結成した「不知火海百年の会（以下、「百年の会」と略す）」と合同研究会や合同合宿を行っていた。第二次調査団は準備中の段階から「「不知火海百年の会」（代表、鬼塚巖さん）とも密接な関係を持ちながらいっしょに共同の調査や聞き取りなどを積み重ねて行きたい」と宣言している¹²⁵。また、最首も「百年の会」のメンバーであり、積極的な交流を促した。第二次調査団は、研究においては専門分野の枠組み内で限定的な活動を行うにとどまったが、それと付随した活動では水俣地域の人々と深い関係

¹²¹ 不知火海総合学術調査団 [1982]、p.52。

¹²² 不知火海総合学術調査団 [1982]、p.52。

¹²³ 映画監督の土本典昭は、調査団の研究会での桑原の報告を聞いて「ああいうスライドと説明、きっと道子さん喜ぶね」と言っている（「海と人」、No.3、1981年11月20日）。桑原の研究は、後述する「不知火海百年の会」が行なっていた、「人と自然との関係」を見直すために、不知火海の生き物と向き合う姿勢と合致する。ここには第二次調査団が「人と自然との関係」を掘り下げて考察する学際研究に繋がる萌芽があったのである。

¹²⁴ 団員の長谷川宏は後年に「「第二次不知火海総合学術調査団」は集団としてのまとまりがわるく、団としての調査報告は出さないで終わった（長谷川 [2009]、p.233）」と述べている。

¹²⁵ 1981年6月25日の羽賀しげ子「五年間の調査報告作成進む」というエッセイの中で触れている（水俣病を告発する会 [1986]、pp.470-471。）

を築こうとしたとも考えられる。そこで、次章では「百年の会」の活動を見ていきたい。

第4章 「不知火海百年の会」の活動

「百年の会」は最首、羽賀、石牟礼らの「調査団関係者」と、鬼塚巖、西弘、杉本栄子らの「調査団の研究対象者」が合同で立ち上げた、自主研究グループである。会長は鬼塚であった。「百年の会」の活動記録は、公式の刊行物がない。そのため、「百年の会」のレターである「水俣通信¹²⁶」と、活動用のレジュメを元に、当時の活動を推察したい。

「百年の会」の活動については、レターを発行していた西が概括している¹²⁷。それを見ると、1979年に「百年の会」の前身である「生き物を大事にしよう会¹²⁸」が立ち上がった。この時期は、調査団が水俣を訪問してから四年目であり、団員と水俣地域の人々が深い関係を築き始めた頃にあたる。西によれば、水俣地域の人々は、調査団との関わりの中で、団員の研究の「専門分野の網目から抜け落ちて行く「何か」¹²⁹」に気づき始め、「水俣で暮らしを立ててきた自分たちでこの地の来し方をすくいにとってみよう、それを改めて専門家の網目に載せては¹³⁰」と考えたという。これは、研究者が専門領域での精緻な議論を積み重ねる中で、内部者がその研究では「自らの生きている魂の世界」を捉え切れていないと気づき、自主研究が必要になったということだろう。

このような認識の下に、1979年1月2日に開催された「生き物を大事にしよう会」では、赤崎が「夜ぶりの話」を、鬼塚が「たうちがね」の話を語った。両者の語りに刺激を受けて、「生きものを大事にしよう会」の参加者は、ライフヒストリーを語りながら「夜釣りで出会う海の生き物」や「浜に住むシオマネキ」について話し合っている。会の後半では、「今すぐ浜に行って貝を食べたい」という要望や、「それでは生き物を大事にしていないのではないか」という反論、「生きものの味がわからないと本当には理解できない」「味を確かめながら生命

¹²⁶ レターは、No.1～No.11 及び番外編（1981年5月28日～1985年8月18日）を入手できたが、以降の活動については不明である。作成は西弘と水俣市待 GAN プロになっている。後者は鬼塚巖の映画製作団体のようなのだが、委細は不明である。また、レターには「百年の会」の会議用レジュメも含まれている。

¹²⁷ 西 [1986]。

¹²⁸ 西の記録によれば「生き物を大事にしよう会」であるが、ほぼ同じ時期に同じような内容で「生命を大事にする会」の活動として角田によって記録されている。（「水俣だより」No.1、1979年1月12日）記録を照らし合わせる限り、この二つの会はおそらく同じ会である。

¹²⁹ 西 [1986]、p.87。

¹³⁰ 西 [1986]、p.87。

を大事にする会にしよう」という意見が出ている¹³¹。

以上の活動は、水俣地域の人々が、自らの培ってきた「人と自然との関係」を当事者として研究する試みだとみなせる。水俣地域の人々は、調査団が外部者として可視化しようとした「人と自然との関係」を承認しながらも、そこからこぼれ落ちて行くものがあると直感した。そこで、もう一度、内部者の目から「人と自然との関係」を再検討しようとしているのである。その時に水俣地域の人々から出てきた方法は、ライフヒストリーの中にある「人と自然との関係」を語りあい、参加者が共に自然の恵みを食べることで、経験を分かちあおうとすることであった。これらの内部者の研究は、大学で制度化された専門家の学問とは異なり、主観的であり、直接的な自然体験を中心に行っている。

この「生き物を大事にしよう会」の試みは、すぐに第一次調査団にもフィードバックされている。1979年5月11日の「調査団ニュース」では、赤崎と鬼塚の話聞いた調査団の団員が、「夜ぶり」に連れて行ってもらう企画を立てていた。しかしながら、残念なことに雷雨で企画は中止になってしまった。羽賀は、企画の中止で団員ががっかりしている様子を「調査団ニュース」に記録している¹³²。この記録からは、水俣地域の人々の内部の視点による「人と自然との関係」に関する知が、調査団に伝えられていることがわかる。また、調査団の側も、内部者の知を積極的に受け入れようとしている。調査団と水俣地域の人々は、交流を通して「外部の知」と「内部の知」を相互補完的に共存させていたと考えられる。しかしながら、「生き物を大事にしよう会」の活動は、座長の赤崎の入院によって、すぐに停止した¹³³。

この「生き物を大事にしよう会」を引き継いで再始動したのが「百年の会」である。「百年の会」は1981年に発足し、第二次調査団の「水俣現地班」という名目でスタートした。そのため、調査団が水俣に調査に訪れるたびに「合同会」を開催している。すなわち、第二次調査団はそれまで築かれた水俣地域の人々との「研究者-対象者」との深い関係を、一步、推し進めて、「共同研究者」の関係に発展させているのである。

この「百年の会」と調査団の関係について、石牟礼は以下のように述べている。

学問の方法論みたいな概念的には東京の本読んで勉強した人達が一応御存

¹³¹ 実際には、角田はできる限り忠実に会員の発言を聞き取り、「早よ、浜に行こい、そして採って、食おごたるなあ」「そら生きもんば大切にすることと矛盾するばい」「ばってん、味ば確かめんと、ほんにやわからんもん」「味ばたしかめて、そして生命を大事にするそういう会にしよう」と書き起こしている。（「水俣だより」No.1、1979年1月12日）。

¹³² 「調査団ニュース」No.33、1979年5月11日。

¹³³ 西 [1986]、p.88。

知ですけども。こちらの方には学校へ行かない人間が沢山おまして。それでもこの南九州の不知火海の地域でさまざまな生き方をして、そのさまざまな生き方の中で全部深いというか広いというか、専門家ばかり。生きた資料の宝庫、人間だけじゃなくて自然も含めてですけども¹³⁴。

上のように石牟礼は、内部者としての水俣地域の人々もまた、この地域の「専門家」であることを指摘している。大学を中心に制度化された学問の上では、研究者である団員が「専門家」であり、水俣地域の人々は「研究対象者」であった。しかしながら、石牟礼の観点から見れば、水俣地域で暮らし、その自然を直接的に体験してきた人々は、非言語的な「人と自然との関係」を熟知している「専門家」である。その意味で、水俣地域の人々は、団員と対等な「専門家」であると考えられる。

では、実際に、「百年の会」はどのような活動をしていたのだろうか。「百年の会」は初期の構想では、「山と海の学校」を設立することになっていた。「山と海の学校」は、活動を学校になぞらえた自主研究会で、「月謝」（研究会費）を集め、「時間割」（話の主題）を定めてお互いに「調べたこと」や「聞いたこと」（研究内容）を報告し、「修学旅行」（フィールドワーク）に行くのである¹³⁵。たとえば、1982年6月9日には、角田豊を講師として招聘し、熊本県北部の菊池川流域の古代史について講義を受けた¹³⁶。神話世界について議論を深めた上で、1983年6月18日に現地にフィールドワークに訪れている。一行は、角田の案内により、古代遺跡を巡った¹³⁷。まさに自律的な研究活動を「百年の会」は行なっていたのである。

また、「百年の会」の会長である鬼塚は積極的な表現活動を展開している。鬼塚は1950年代から、8ミリフィルムで映像作品を撮影してきた。1968年の「水俣病Ⅰ¹³⁸」、1969年の「水俣病Ⅱ¹³⁹」では、公害のもたらす健康被害の悲惨さや環境破壊の深刻さを撮影し、告発を目的とする映像作品として発表した。これらの作品は全国の労働組合に貸し出され、水俣病の運動に大きな影響を与えた。また1970年には、胎児性水俣病患者のドキュメンタリー「怒れない世界¹⁴⁰」を撮影した。その作品の中で、鬼塚は胎児性水俣病患者を「声なきもの」として描き、「犠牲者」として表現している。これらの作品の特徴は「人と人との関

¹³⁴ 「水俣通信」No.3、1981年10月31日。

¹³⁵ 「百年の会」レジュメ、「不知火海百年の会 正月例会」、1982年1月23日。

¹³⁶ 「水俣通信」No.5、1982年6月9日。

¹³⁷ 「水俣通信」No.9、1983年7月17日。

¹³⁸ 映像資料、鬼塚、[1968]

¹³⁹ 映像資料、鬼塚、[1969]

¹⁴⁰ 映像資料、鬼塚、[1970]

係」を描き、水俣病の問題を告発していることである。

他方、1980年代の鬼塚の表現活動は「人と自然との関係」に焦点を当てたものに移行していく。特に8ミリフィルムの映像作品「シオマネキ¹⁴¹」は、干潟を駆け回る小さな蟹を記録している。片方のハサミを振り上げてちょこまかと移動する蟹を接近して撮っている。ひたすら蟹が撮影された映像が続き、鑑賞者には蟹の動きがだんだんとユーモラスに見えてくる。映像の中で、鬼塚は「蟹たちは人間にはわからない言葉で囁きあっているのではないのでしょうか」と問いかけてくる。これは、鬼塚が自然と向き合う中で、「声なきもの」の声を聞こうとする営みを通して製作した作品である。そのことに鑑みれば、1970年代の鬼塚が、胎児性水俣病患者を「声なきもの」とみなして「犠牲者」として描いたのに対して、1980年代の鬼塚は、蟹たちを「声なきもの」であっても「独自の世界を持つ生命」として描いていると言える。この鬼塚の「声なきもの」に対する姿勢の転換は、鬼塚の表現の重心が「人と人との関係」から「人と自然との関係」へと移動しているのと同時に起きている。

さらに鬼塚は、機関紙でエッセイを連載¹⁴²し、写真を発表している。また、それまでの表現活動をまとめた、「水俣のうちがね展」を企画主催した。鬼塚はその展示の挨拶文を書くにあたり、「写真とはひとつの芸術であると思っています。自分にはそんな写真が出来ないことを確信しています¹⁴³」という言葉で始めている。鬼塚は単独で展示を準備し、「水俣の方言をまじえての写真パネル、立看板作り、チラシの配布、アンケート作り等々、何から何まですべてを自分の手作りとして5人でも……10人でもいい……水俣の人に見てもらって……そんな気持ちでいます¹⁴⁴」と述べる。これらの言葉から、鬼塚が制度化された「芸術」を目指したのではなく、水俣地域の人々の間で共有される「草の根の表現活動」として、写真や映画、エッセイに取り組んでいたことが推察される。これらの鬼塚の半生と独自の表現活動は、1986年に自伝『おるが水俣¹⁴⁵』にまとめられ、出版された。以上のような、鬼塚の作品や書籍は、「百年の会」が目指した水俣地域の人々の「内部者としての知の結晶化」であると言えるだろう。

加えて、「百年の会」の参加者の表現活動としては、飯尾都子のイラストレーションが挙げられる。飯尾の活動の詳細は不明であるが、1985年3月に西日本

¹⁴¹ 「シオマネキ」8ミリフィルム、相思社収蔵、撮影日不明。相思社のデータベースでは、1982年7月撮影年月日になっているが、1981年9月5日に「水俣病を告発する会」熊本例会で上映している（告発する会 [1986]、p.488）ため、その前の撮影だと思われる。

¹⁴² 鬼塚巖「水俣の海岸を見て歩く」（写真とエッセイ）No.1～No.7（1982年2月25日～1982年12月25日）。告発する会 [1986] に随時収録。

¹⁴³ 「水俣通信」No.6、1982年8月23日。

¹⁴⁴ 「水俣通信」No.6、1982年8月23日。

¹⁴⁵ 鬼塚 [1986]。

新聞に掲載された石牟礼道子のエッセイの挿絵を描いている¹⁴⁶。その際の肩書きが「百年の会」の会員になっている。このように、「百年の会」は、「人と自然との関係」に焦点を当てた、独自の研究活動を行なっているが、その成果の一部は表現活動として発表されていたのである。

こうした「百年の会」の活動は、1981年から1982年にかけて活発に行われているが、1983年ごろから失速していく。この活動の縮小時期は、第一次調査団が『水俣の啓示』を出版した時期と重なっている。また「百年の会」のレターには、第一次調査団との合同会や交流、『水俣の啓示』へのコメントが多数、記録されている¹⁴⁷が、第二次調査団についてはほとんど記録がない。さらに、第二次調査団の「中間報告」および諸活動の記録の中に、「百年の会」への言及はほとんど見当たらない。すなわち、第二次調査団は第一次調査団から財産を引き継ぐ形で「百年の会」との連携を始めたのだが、それを研究活動に活かすことはできなかったのである。

他方、最首が第二次調査団の活動において掲げた理念は、現在の研究においても重要な意味を持つ。専門家主義を越えて、現地の人々との共同研究の中で、新しい知見を得ることができるという発想は卓越している。さらに、自然科学の分野の研究者へ環境科学の理念を提起しつつ、自らも現地で研究活動を行うという挑戦的なスタイルは、先駆的であった。こうした第二次調査団と「百年の会」の試みは、あまりにも時代を先取りして時期尚早であり、当時は明示的な成果を上げることができなかったと考えられる。しかしながら、調査団の遺産は、その後の水俣研究へと引き継がれていったという可能性は残されている。

おわりに

不知火海総合学術調査団の研究活動は、共同体に焦点を当てた「人と人との関係」から出発し、水俣地域の人々との深い関係を構築することを経由して、「人と自然との関係」を掘り下げた環境思想の可視化を成し遂げるに至った。この調査団の研究成果を受けて、水俣地域の人々は自らの経験する「人と自然との関係」を改めて再検討し、自主研究や独自の表現活動を展開していった。このプロセスの中で、水俣地域では、外部者によって構築された「知」の刺激によって、内部者の「知」が可視化され、相互交流がもたらされた。研究者と水俣地域の人々による、「内部の知」と「外部の知」の統合が実現したとはいいがたいが、理念として提示されていたことは特筆するに値する。

さて、以上のプロセスは、「被害-加害関係」を中心に据えた「公害問題」か

¹⁴⁶ 石牟礼エッセイ、[1985]。

¹⁴⁷ 「水俣通信」No.10、1983年10月25日。

ら、より広範な「環境問題」へ移行したわかりやすい例であると言える¹⁴⁸。この移行は、運動の性質の継時的変化と連動していると考えられる。水俣病問題の運動史を紐解くと、1973年に第一次訴訟の判決が出ている。また、同年に患者補償協定が締結され、1974年から施行された。水俣病の被害が法廷や行政機関によって認められ、補償が始まったのである。調査団が活動を開始した1976年は、ちょうど水俣病の「闘争の時代」が終わっていく時期であったのである¹⁴⁹。しかしながら、水俣病で壊滅的な被害を受け、人間関係も引き裂かれた水俣地域の再生は、それ以降も大きな課題として残り続ける。その「再生の時代」の始動時に、調査団は水俣地域の人々の環境思想を発見したのである。この「公害問題」から「環境問題」への移行は、「闘争の時代」から「再生の時代」への移行と機を一にしている。言い換えれば、水俣地域の人々が「闘争」から「再生」へと向かう時に、鍵となるのが「人と自然との関係」を中心とした環境思想であった。

それと同時に、1970年代以降も多くの裁判闘争が行われ、水俣病患者への補償への努力が続けられている。その傍らで、調査団は水俣地域の再生を目指した人々の活動に目を向け、取り上げてきた。今後の課題としては「調査団とそれを取り巻く人々の活動が、その後の水俣地域での活動とどう連関しているのか」が挙げられる。たとえば、「水俣病センター相思社」は、同時代である1977年に「水俣実践学校（後の生活学校）」を設立している。これは、全国から水俣に集まった若者が、水俣地域の人々に農業や漁業を学び、自活生活を行うという試みであった。これらの活動は、外部者が水俣地域に住み、内部者の持つ「人と自然との関係」を学ぶ営みであったと考えられる。このような点については、稿を改めて検討したい。

¹⁴⁸ 同時に、この図式から水俣病の歴史を見ることで、見逃してしまう面も多大にあると考えられる。本研究はあくまでも一つの視点の提起として行いたい。

¹⁴⁹ このことは、第一次訴訟の患者支援を担ってきた「水俣病を告発する会」も自覚的であった。「水俣病を告発する会」は1969年から1973年まで水俣病患者の闘争を支えるために、機関紙「告発」を発行してきた。しかしながら、1973年の訴訟判決と患者補償協定の締結を機に、「患者家族のチツとの「はげしいたたかい」の季節は終わった（水俣病を告発する会[1986]、p.25）」と宣言し、新たな機関紙「水俣 患者とともに」を1973年から発行し始める。そのことについて代表の本田啓吉は創刊号で「患者家族のたたかいは、いままでのように表面にあらわれ出るものなど何一つないたたかいだろう。離れることもない病床でのたたかいであり、日々の生活に耐えつつ語られることのない胸の奥でのたたかいである（水俣病を告発する会 [1986]、p.25）」と述べている。本田は、この「たたかい」を支えるために支援者は新しい方法を模索するべきであり、機関紙も今後は「患者家族の生活と気持をたしかめるのに有効ならば、小さなこともすべてのせていくし、それにふさわしくスタイルも遠慮なしに変化させて生きたいと考えている（水俣病を告発する会 [1986]、p.25）」と述べている。以上のように、水俣地域での活動を継続して行ってきた団体にとっても、1970年代半ばから1980年代にかけての時期は、法的な「闘争」から日常の「再生」への移行期として捉えられていたことがわかる。

*本研究は、「公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団」国内研究助成および「公益財団法人日本生命財団」環境問題研究助成を受けたものである。

参考文献

【日本語文献】

- 石牟礼道子・鶴見和子『言葉果つるところ』藤原書店、2002年。
- 色川大吉編『水俣の啓示：不知火海総合調査報告』上下巻、筑摩書房、1983年。
- 色川大吉「不知火海総合調査五年を経て：環境破壊と人間再生のドラマ」『同時代への挑戦』筑摩書房、1983年、pp.179-230。
- 色川大吉「不知火海総合学術調査団の成果と課題」（講演書き起こし）、東京・水俣展実行委員会、1994年11月29日。（相思社収蔵）
- 鬼塚巖『おるが水俣』現代書館、1986年。
- 川本隆史「“不条理な苦痛”と『水俣の痛み』——市井三郎と最首悟の〈衝突〉・覚え書」飯田隆他編『いま〈哲学する〉ことへ』岩波書店、2008年。
- 門脇佳吉・鶴見和子編『日本人の宗教心』講談社、1983年。
- 鬼頭秀一「水俣と抵抗の原理としての環境倫理学」丹波博紀・最首悟編『水俣五〇年——ひろがる「水俣」の思い』作品社、2007年。
- 鶴見和子「水俣民衆の世界と内発的発展」『鶴見和子の曼荼羅』第4巻、藤原書店、1998年、pp.28-79。
- 西弘「生きてグニャグニャとつながる通路を」『思想の科学』第415号、1986年、pp.87-88。
- 羽賀しげ子『不知火記：海辺の聞き書き』新曜社、1985年。
- 長谷川宏『ちいさな哲学』春風社、2009年。
- 水俣病を告発する会編『縮刷版「水俣」』葦書房、1986年。
- 宗像巖『美と象徴と魂の風景』宗像巖論集編集委員会、1999年。
- 森下直紀「水俣病史における「不知火海総合学術調査団」の位置——人文・社会科学の「共同行為」について」山本崇記・高橋 慎一編『「異なり」の力学——マイノリティをめぐる研究と方法の実践的課題』生存学研究センター報告14、2014年、pp.319-348。
- 山懸登・土井隆雄・最首悟・田口正編『環境汚染へのとりくみ』恒星社厚生閣、1983年。

【英語文献】

Thomas Alan Stephenson & Anne Stephenson, *Life Between Tidemarks on*

Rocky Shores, W. H. Freeman, 1973.

【映像資料】

鬼塚巖「水俣Ⅰ」（1968年）、『水俣病ビデオ Q&A／水俣の子は生きている／鬼塚巖 作品』、シグロ。

鬼塚巖「水俣Ⅱ」（1969年）、『水俣病ビデオ Q&A／水俣の子は生きている／鬼塚巖 作品』、シグロ。

鬼塚巖「怒れない世界」（1970年）、『水俣病ビデオ Q&A／水俣の子は生きている／鬼塚巖 作品』、シグロ。

鬼塚巖「シオマネキ」、8ミリフィルム、撮影日不明。（相思社収蔵）

【新聞記事】

石牟礼道子エッセイ、西日本新聞、1985年3月15日、3月30日。

色川大吉インタビュー「水俣病に総合学術のメス」熊本日日新聞、1976年3月25日。

菊地昌典「水俣と私<中>」、東京新聞、1977年1月19日。

【レター】

「海と人」（羽賀しげ子作成）、第二次不知火海総合学術調査団、No.1～No.12、1981年7月30日～1983年9月28日。（相思社収蔵）

「調査団ニュース」（羽賀しげ子作成）、不知火海総合各術調査団、No.1～No.45、1976年4月24日～1981年4月9日。（相思社収蔵）

「水俣だより」（角田豊子作成）、生命を大事にする会、No.1、1979年1月12日。（相思社収蔵）

「不知火海百年の会」（西弘・水俣市侍 GAN プロ作成）、不知火海百年の会、No.1～No.11 及び番外編、1981年5月28日～1985年8月18日。

【手紙】

最首悟、柳田耕一宛、1981年8月8日。（相思社収蔵）

最首悟、相思社職員宛、1982年1月。（相思社収蔵）

【報告書】

不知火海総合学術調査団「不知火海域における生物学的、医学的、社会学的な環境変化に関する実証的研究 1982年度年次報告」1982年12月。